クリティカルインシデントの事例から見る日中異文化比較

～日中同形異義語・同形類義語の事例分析をもとに～

二　宮　いづみ

要　旨

日本には昔から“島国根性”ということばがあるが、これは四方を海に囲まれた日本国土の地理的形状をデメリットとしてとらえ、他国の人や様々な文化に対して排他的・閉鎖的であることを皮肉った言い方として使われており、概してプラスイメージとして用いられることはない。近年、日本で生活する外国人や日本への旅行者の増加に伴い、様々な問題が多方面で浮き彫りになっているが、これらの問題を解決する糸口としての異文化理解の涵養は我々日本人にとって必須の条件となっている。しかしながら異文化を理解しようという気持ちがあっても、「異文化」そのものを「異文化」として認識できていなければ自国文化と他国文化の比較はできない。我々日本人が外国人と何らかの問題を抱えた時、双方の物差しの存在を念頭に、客観的かつ多角的視野で問題を分析・評価することにより掛け違えたボタンの修正ができるようにするためには異文化トレーニングは欠かせない。また「異文化」の理解、容認、共生への過程には「自文化」のアウェアネス（気づき）が前提となる。もはや“島国根性”は真の日本のグローバル化を阻害する要因以外の何物でもない。異文化理解の方法として、異文化間トラブルの事例を挙げ分析することで自文化主義を改め、多文化容認、共生に向けて各々が自分の価値観や自国文化を基準にした偏った判断をしないよう、異文化理解の概念を拡張させていく必要性を論じる。

【キーワード】　異文化理解　　クリティカルインシデント
D・I・E法　　日中同形語

１．はじめに

2010年現在、日本の大学（大学院を含む）、短期大学等高等教育機関に在籍する留学生は14万１千人を数え、このうち中国人留学生が８万６千人つまり全体の60％を占めている。しかしながらこの留学生の最大集団を形成している中国人留学生は他国の留学生に比べ、日本語力や経済力等に大きな問題を抱え、日本での教育、生活環境に適応しにくい状況が浮き彫りになっている。

日本と中国は一衣帯水で隣り合っていることから、縁も深く、歴史も長く今日まで途切れることなく「同文同種」の関係を形成してきた。文化的交流も数百年、いや千年以上にも遡る。両国は漢字を使用する漢字文化圏であり、米を主食とする食文化も似ており、欧米人から見ればその区別は判断できないほどの外見であることなど、多くの面で共通項を持ちながら、近年の日中間の問題から見ても決して相互理解が十分であるとは言えず、その根本にある問題は文化や考え方の違いからくるものも大きい。日本と中国は、実は「似て非なるもの」でもある。

日本人と中国人の間に横たわる問題は、政治的、経済的、文化的等多岐にわたるが、本稿では日本語と中国語の表記的概念から生じる思い込みや誤解が招くクリティカルインシデントの事例を挙げ、その原因を日本語と中国語の同形語の側面から分析し日本と中国の異文化比較を試みる。

２．クリティカル・インシデントとは

クリティカル・インシデントのクリティカルとは“危機的な”“重大な”“決定的な”という形容詞で表され、インシデントとは“事件”“出来事”

“ハプニング”等の意味を持つ。つまり“重大で危機的なアクシデント（出来事)”という意味であり、 医療現場等で使われる場合は、日常の診療中で起きたヒヤリとしたりハッとしたりした経験や事例をまとめたインシデントレポートという形で医療事故や医療過誤の発生を防止する目的で作成される。

異文化コミュニケーションの分野においては、習慣、風習、言語等文化の違いより起きた問題についての事例のことであり、内容はそれが起きた場所、どんな状況かなどが具体的に記述される。まず問題が起きた事例を知り、なぜそのようなことが起こったのか、どうすればその問題を解決あるいは回避できたのかを考えることで、自分の文化と他の文化の違いを理解することができる。留学生に限らず、誰もが自国と他国の異文化間で何らかの問題に遭遇したとき或いは危機的な状況に置かれた時、対応を誤らずに済むための異文化理解のトレーニング法として研究されている。

本稿では異文化間教育、コミュニケーション教育の方法として、言語文化に照準を合わせ、日中間の漢字の差異による事例を自文化と他文化の両方の立場から考える訓練として、D・I・E 法を用いて検証してみる。文化を異にする人とのコミュニケーションにおいて、誤解が生じたり、自文化中心主義（自国の価値観のみが正しく、他の価値観を受け入れない）に陥ることは珍しくない。その場合 D・I・E 法を用いて、冷静にその事象の検証を行うことは、自分の文化と他の文化の違いを理解する端緒ともなり得るし、自文化の習慣や価値観だけで誤った解釈による感情評価を防ぐことができ、トラブルや摩擦を客観的な視点から分析し回避できる効果がある。D・I・E 法は以下のような経緯で行う。

異文化トレーニングの中では、トラブルの事例が示され、それについて何人かのグループで、それが起きた原因、どう対応すれば良いのかなどを話させることにより自分の解釈や評価が絶対的なものではないことに気づき、他を理解できるようになる効果があるとされる。

2-1. D・I・E 法の定義

文化を異にする人とのコミュニケーションにおいて、トラブルや誤解が生じる原因として次の二つの場合が考えられる。

①事実をはっきりと把握しないまま憶測をもとに解釈・評価を急ぎすぎること
②同時に、①の解釈・評価を相手のことを十分に理解しないまま行ってしまうこと

（アトムアンドカンパニービジネス異文化研修用語解説より）

D・I・E 法とは、D（Description＝問題事実の記述）、I（Interpretation＝問題の解釈・説明）、E（Evaluation＝評価）の頭文字をとったもので、この三段階の作業を段階を追って進めることにより冷静に客観的に事実分析をすることができ、トラブルを回避できるとされる。

１）第一段階：事実の記述＝描写

異文化接触場面で起こりうる問題事例の情報を正確に、意味づけをせずに事実のみを列挙する。事実の描写は客観的に行うことが大切である。

２）第二段階：事実の解釈

第一段階の情報に、なぜそれがなされたのか、それにはどういう意味があるのか等、意味づけをしていく。その事実は自文化と異文化とではどんな意味を持つか解釈する。ここで大切なことは、解釈は必ず複数挙げ、いろいろな立場からの解釈を考える。少なくとも当事者二人の立場からの解釈は必須。

３）第三段階：事実の評価

異なったサイドからの解釈とそれに伴う評価を考えているうちに、自分だけの性急で偏った価値観だけをよりどころとする評価はできなくなる。

2-2. D・I・E 法における異文化理解の効果

人は常に各々の文化的価値観やコミュニケーションスタイルを意識しながら対人関係を構築しているわけではない。実際に予期せぬ出来事や誤解が生じた場合に、改めてその原因を究明しようとする。コミュニケーションギャップは対留学生（外国人）に限らず、家族間でも職場内でも人間関係が発生する全ての場所、場合において起こりうる。D・I・E 法は、その問題を引き起こした個人の価値観や文化的「違い」を言語化することによってその「違い」を共有でき、それよって決めつけや思い込みといった感情を優先させた判断が緩和され、不確実性によるストレスが大きく低減されることで相手を理解できるスキルとして有効であると考える。たとえ相手を理解できなくても相互の行動パターンの「違い」を共有することで自文化中心の考え方を内省でき、結果的に建設的なコミュニケーションと人間関係の継続が可能となり、そのプロセスを経てこそやっと相互理解（異文化理解）という大きな目標を達成することができる。

3．日本と中国のクリティカル・インシデント事例を D・I・E 法で検証する

それでは以下に実際に検証を試みる。ワークシートに D（事実）を記入し、当事者双方の I（解釈）・E（評価）を記入することでいかに接触場面において意思の疎通がなされていないかを明らかにできる。その後にその事例発生の要因となる文化的背景や誤解の原因を考察する。

3-1. 日本と中国の同形語における誤解の事例

中国語を解さない日本人が旅行をする場合、よく「筆談」ということばが使われるが、互いに漢字を使用する民族だからこそ、漢字は時に最大の味方にもなり得るし、最大の落とし穴があることも理解しておく必要がある。

日中の漢字語彙には同形語と異形語があるが、日中同形語の分類は1978年

に文化庁から出版された『中国語と対応する漢語』の分類規準に従えば、同形同義、同形類義、同形異義、中国語にない日本の漢字語の４つに分類される。本章では同形語の中でも同形異義語及び同形類義語によるクリティカルインシデントに限定しての事例を述べる。

日本も中国も漢字使用国であることから、ことばがわからなくても筆談で互いに親近感を持ち理解し合えると考えてしまいがちだが、漢字語彙の字面だけで決めつけや憶測による誤った理解も避けられず、それが互いのコミュニケーションの疎通を妨げる要因になることもある。

（事例１）「寿」という漢字で連想するもの

D （事実）	中国で中国人の友達の結婚式に出席した日本人が、日本から持参した金や銀で鶴を模った水引を使用した豪華な祝儀袋に「寿」という文字の表書きでお祝いを渡し、怪訝な顔をされた。	
I （解釈）	日本人の解釈	日本からわざわざ買って来たお祝い袋であげたので、きっと珍しくてきれいだと喜んでくれるだろう。 せっかく日本のご祝儀袋であげたのに嬉しそうにしないのは、中の金額に不満があるのかもしれない。
	中国人の解釈	おめでたい結婚式に「寿」の袋で渡すとは、もしかしたらこれは両親への祝い金なのだろうか。日本では結婚式で親にお祝い金を渡す習慣があるのかもしれない。
E （評価）	日本人の評価	好意を喜ばないなんて何だかご祝儀を渡す甲斐がない。 たとえどんな理由でももう少し嬉しそうにすればいいのに。
	中国人の評価	結婚式に“寿”の袋だなんて非常識だなあ。それも白い袋で。 まるでお葬式みたいだ。

ある日本人が中国を訪問した際、いたるところで「寿衣」と書かれた看板を目にし、結婚式の衣装を取り扱う店だと思い写真に収めた。しかし、ウェディングドレスが店頭に飾ってあるわけでもなく地味な店構えであったため、帰国後中国人の友人に写真を見せて聞いてみると、結婚式の衣装とは全く正反対の「死に装束」の店であることがわかり彼女は驚いた。共通の漢字を使用する中国と日本でも、その意味合いは大きく異なっている場合もある。

「寿」という漢字を見ると、日本では結婚式などのおめでたいことを想像しがちであるが、中国では「囍」（喜を重ねた漢字）で表現する。中国で「寿」という漢字は、還暦を過ぎた人の誕生祝や長生きした人の葬儀に関するものを指したりと、老人のための漢字である。従って、ここでは「寿」という字の解釈が互いに違っており、文字文化の通念上の違いを認識できていないことが問題と言える。

また、「寿」という同形類義語の双方の解釈のズレによる問題発生に加え、実は「白」と「赤」という色彩語の持つ文化的側面からの認識の差異も大きく影響している。中国では古代の「五行思想」の中の「白虎」に関連させ、「白」は死亡・邪気・恐怖を意味し、不吉な事のシンボルとして使われることが多い。逆に「赤」は邪気を払い運気を上げる色として慶事は「赤（紅）」で表現するため、祝儀袋は真っ赤でなくてはならない。結婚式で白い祝儀袋に「寿」の文字は中国人にとっては「お祝」としては不適切であるということを日本人側は認識すべきであるし、中国人側も日本の「寿」と「白」の意味解釈を加えることで相互理解は可能になる。

（事例２）日本には「雀」料理の店が多い

D （事実）	日本に来たばかりの留学生 T 君は、町を案内してくれた日本人に「麻雀」の看板を指されて、笑いながら「あなたは中国人だから得意でしょう。」と言われ不愉快になり「私はあれは食べませんし、中国人があれを好きだというのは偏見ですよ。」と答えた。その後日本人が T 君をマージャンに誘うことはなかった。	
I （解釈）	日本人の解釈	マージャンは中国から来た遊びだから、中国人はみんなできるしきっと T 君も得意に違いない。マージャンを通してもっと仲良くなれるかもしれない。マージャン仲間が増えそうだ。
	中国人の解釈	「麻雀」って何の店だ？「スズメ」を売っているのか？「スズメ料理」専門店なのか？中国人は誰でもみな「雀」を食べると思っているんだろうか。
E （評価）	日本人の評価	早く打ち解けたい、友達になりたいと思い、是非今度いっしょにやろうと言いたかっただけなのに、何を声を荒げているのだろう。わざわざ案内してやっているのに。
	中国人の評価	私が「雀」を食べるかどうかも知らないくせに、**にやにや**笑いながら「得意でしょう」とは失礼だ。中国人は何でも食べると思っているに違いない。

来日したばかりの中国人は、日本の町中いたるところで見かける“麻雀”の看板を見たとき、何のために町中で雀を売っているのか、または日本人は雀の料理をよく食べるのかと不思議に思うという。日本語の「雀」（すずめ）は中国語では「麻雀」と書く。この事を互いが知らなかったために、「麻雀が得意」（日本人）と「麻雀（スズメ）を食べることが得意」（中国人）という認識のズレが発生。言い合いになっても日本人が「麻雀」＝「スズメ」、または中国人が「麻雀」＝「麻将」であることに気がつかない以上、言い合いは平行線。中国では麻雀のことを「麻将」（マージャン májiàng）といい、音は似ているが表記が異なる。

また、ここで問題となるもう一つの要素として「笑い」の表現である。異文化コミュニケーションに関連して想起するのは言語によるメッセージだが、実は顔の表情、視線、身振り、身体的特徴また発話者の肌の色まで等、非言語メッセージの影響の重要性が最近注目を集めている。また日本ほどオノマトペの多い言語はないと言われるが、“にこにこ”と“にやにや”には大き

な違いがあるものの、時として相手から受ける印象は自己の先入観や趣向、会話の内容や相手の表情から主観的な判断に偏ってしまうこともある。“にこにこ”と笑いかけたつもりでも相手が“にやにや”して不快だと感じることもあるということを想定しておくことも必要である。

（事例３）「有難うございます」はひらがなで書け

D （事実）	ある中国人旅行者が日本へ初めて旅行に訪れ、タクシーを利用した。車内で「毎度ご乗車有り難うございます」という文字を見て不安になり、「下車」の紙を運転手に見せながら大声で何かを言っている。すぐに停車できない状況だったが、運転手はあわてて道路脇に停車させ下車させた。	
I （解釈）	日本人の解釈	「車は急には止まれない。」一体何を慌てているんだ。停車できる場所も決まっているし、車内で大声で騒ぐとはこちらがびっくりして事故を起こしそうだ。
	中国人の解釈	このタクシーは違法かもしれない。運転手も「止めて！」と言っているのに、すぐに止めようとしないし日本でも信用できないタクシーはあるのかもしれない。
E （評価）	日本人の評価	乗って来たばかりで、急に「止まれ」「降りる」とはマナー違反。 大声で一方的にまくしたてて、何を怒っているのだろう。
	中国人の評価	「毎度ご乗車有難うございます」とは 「なんと恐ろしい車だろう」。 日本は安全な国だと聞いていたが、こういう危険なタクシーには乗りたくない。何だか縁起の悪いタクシーに乗ってしまった。

感謝を表すことば「有り難い」は、通常「ありがたい」とひらがなで書くことが多い。しかしながらタクシーやバスの車内で「毎度ご乗車有り難うございます」という文字を見たことがある人も多かろう。観光などで日本に初めてやってきた中国人が乗り物内でこの文言を見た場合、不安になるか怯えることもある。中国人が漢字表記のみで意味を判断した場合、日本語の意味とはかけ離れた意味になる場合もある。「毎度乗車有難」は中国語では「毎回乗るたびに災難がある（有る）」と字面通りの意味になる。「ありがとう」と「有難う」は文字だけを見れば日本人と中国人の解釈は大きく異なる。

また、ここでも文字表記の問題以外に「声のトーン」に関する副次的な要

因が介在する。

中国語は日本語と違い、息の性質を使って区別する有気音・無気音や、同じ語でも音の高低で違う意味を表す声調の存在から必然的にはっきりと大きい声で話す傾向があり、それが日本人には強いことばとして認識されることも多い。中国人が普通に話しているだけで「怒っている」「喧嘩をしている」と思ってしまうこともある。

（事例４）“妖精”は可愛くもなんともない

D （事実）	日本人のご主人と結婚して来日した王さんは、最愛の愛娘が幼稚園の発表会で“妖精”の役をもらったことで、腹立たしく思い担任に抗議した。担任は外国人モンスターペアレンツとして園長に報告。事態は幼稚園の先生やその他の日本人保護者を巻き込んで、配役の交代劇に進展。	
I （解釈）	日本人の解釈	中国人のお母さんに、日本での初めての発表会を楽しんでもらいたいと「妖精」のかわいい役を当てたのに何が不満なのだろう。主役じゃないのが気に入らないのか。外国人のお母さんだと思って気を使ったのに、こっちの配慮なんて全然理解してくれない。
	中国人の解釈	どんな劇に「妖精」の役が出てくるのだろう。子どもの劇にふさわしくない。子どもには子どもらしい可愛い役を与えるほうがいい。 うちの子どもに「妖精」なんてひどい役をやらせるなんて許せない。
E （評価）	日本人の評価	中国は一人っ子政策の国だから子どもを溺愛するとは聞いていたが、ここは日本。配役に口を出してくるなんて日本のモンスターペアレンツと変わりない。日本人を信用していない。
	中国人の評価	日本人がやりたがらない役を外国人だからわからないと思ってやらせるなんて。日本人は外国人を低く見ている。

「妖精」という言葉を聞けば、多くの中国人は「西遊記」の中に出てくる美しい妖怪を思い浮かべる。三蔵法師の肉を食べることで不老不死になるか仙人になることができるので、彼女たちはあらゆる手段で三蔵法師を誘惑する。つまり悪女、妖女なのである。中国人がイメージする「妖精」は可愛いどころか人を惑わす化け物である。一方、日本人は「妖精」という言葉に、森の中の精霊か美しいファンタジーの世界をイメージし、可愛いさや透明感のある可憐な女の子を思い浮かべる。「妖精」という言語的要因と文化的背

景が両国間相互理解の障壁となり得ることが推測できる。数十年前スケート界で一世を風靡したジャネット・リンは「銀盤の妖精」と呼ばれたが、もし彼女が中国人であったならその横断幕を見て、さわやかな笑顔で手を振るなどという行為ではなく、仏頂面で無視する態度をとったかもしれない。オリンピックなどスポーツの試合では、この横断幕の文言がよく文化摩擦を引き起こすが、中国人のスケーターに歓迎する意味で「銀盤の妖精」の横断幕を掲げたとすれば、やはりこれもクリティカルインシデントの事例発生の可能性があることを認識しておいたほうがよい。

（事例５）“いとこ”は「家族」か

D （事実）	ある日本の学校で、「国から家族が来るので空港まで迎えに行きたいから授業を休みたい。」と申し出た留学生に対し教師は快諾したが、後日それが親戚の人だったことがわかり教師は騙されたと学生に嫌みを言った。学生は騙した覚えはない、言いがかりだと教師に反発。二人の関係は悪くなった。	
I （解釈）	日本人の解釈	「家族」だというから祖父母か両親または兄弟だと思って許可したが、遠い親戚だったとは。いろんな理由をつけて休みたがる。困ったものだ。
	中国人の解釈	はるばるとやって来た「家族」を空港まで迎えに行くことがそんなに悪いことだろうか。
E （評価）	日本人の評価	中国人はうそつきだ。いつも「家族」を理由に学校を欠席するが、一体何人の「家族」がいるのだ。いとこぐらいで大の大人が大事な授業を休んでまで出迎えに行く必要はない。
	中国人の評価	「家族」が来たというのは本当なのに、「うそを言った」とか「騙した」とか、どうして信用してくれないのだろう。私は先生を騙すような人間じゃないのに、先生は私を信用していない。がっかりだ。

NHK の中国語講座でお馴染みの相原茂さんのコラム「中国語ドットコム」によれば、『日本語の「家族」は夫婦とその血縁関係者を中心に構成され、近年では親と子供のみの「核家族」が一般的になっており、「家の人」を指す時も、基本的にはこれらの人々を指し、日本語の「家族」の意味に対応する中国語は“家族”jiazú ではなく、“家人”jiarén（“家里人”jialirén も可）である。「家族」は日中同形語だが、中国語では日本語のそれよりも大きな

血縁集団を指し、必ずしも同じ家に居住するとは限らないが、同じ姓を有する、幾つも枝分かれした数代にわたる人々を指す言葉である。日本語の「一族」に近い意味を持つ。』このことから間違いなく中国人にとってはいとこも「家族」であり、嘘つき呼ばわりされることには納得できないということになる。日本語を母語としない作家で初めて芥川賞を受賞した楊逸（ヤン・イー）さんは、「華人とは」という質問に対し「メンツ」と「家族」を重視すると答えている。“中国人”を“華人”と言うことでまた別の意味があるのだが、とにかく中国の人たちが「家族」と考える範囲は日本人ほど狭くなく、「一族」を意味し、その「家族（一族）の絆」は日本人が想像する以上に強固なものである。

3-2. D・I・E 法を用いた分析の効用

以上、日本語と中国語の同形異義語または同形類義語による言語的側面から発生するクリティカルインシデントの５つの事例を挙げた。これらトラブルの事実そのものには軋轢、摩擦を生むほどの緊急性や重篤性は発見できないかもしれないが、このような些細な認識のズレがスムーズなコミュニケーションの妨げになる可能性があることを理解しておけば、異文化コミュニケーションの現場で何らかの心的ストレスを抱えた時、D・I・E 法を用いて問題を客観的に言語化することで、双方の無意識な思い込みの解釈の存在をあらためて認識、修正できる。即言語化できなくとも自己内対話を通じて時間的に一呼吸おくことは性急な解決によるトラブルの悪化を防ぎ、冷静な判断を以て異文化を理解することにもつながるという点で効果を発揮する。

４．教育現場で認識しておきたい日中同形語

“ASAHI　e-text 中国語（2008）”という中国語学習者向けの web サイトで「日中同形語のはなし」というおもしろい記事を発見したので以下に引用する（一部改変省略）。

「娘」（ニャン）とは「お母さん」のことだ。中国女性に惚れて「娘さんを私にください。」と言うときには気をつけなければならない。間違って彼女のお母さんを小躍りさせてはならない。有名な日中同形異義語は心得ておかねばならないのである。

例えば「汽车」は「汽車」にあらず「自動車」だとか、「手纸」と書いて、これは「トイレットペーパー」。「汤」これはもとの字は「湯」で日本語なら「お湯」だが、中国語では「スープ」という意味だ。日本に来たばかりの留学生は日本の銭湯に大きく「亀の湯」とか「鶴の湯」とあるのに驚く。「亀のスープ」や「鶴のスープ」を売っている。日本人はそこに洗面器を持って買いに行く。中に入ってみると「男スープ」「女スープ」とある。男も女もすすんで裸になっている。人間もスープにされるようだ。なんというおそろしい国だ。銭湯を逃げ出して振り返ると、高い煙突から煙が立ち昇っている。さてはあれは人間を釜茹でにしてスープを作っているためか。と、まあ、このぐらいの小咄はできなくてはならない。(中略)

人の名前では「花子」がなんと「乞食」という意味になってしまう。1年生ですぐに習う中国語にも日中同形異義語がふくまれている。日本語の「大家（おおや)」は家主のことだが、中国語では「みんな、皆さん」という意味になる。「みなさんこんにちは！」は「大家好！」だ。「飞机」は「飛ぶ机」だ。しかし「机」というのは実は「機」の簡体字。そうと分かればこれは「飛ぶ機械」で「飛行機」と納得がゆこう。ちなみに「手机」は「手に持つメカ」で「携帯」のこと。「耳机」なら「イヤホン、ヘッドホン」だ。「死机」となると「死んで動かないメカ」でパソコンが「フリーズする」ことだ。中国語の「新闻」 は「ニュース」の意味。「新聞」のことは 「报（報)」とか「报纸（報紙)」という。《人民日报》 がいい例だ。

日本で「特別な計らい」を意味する「便宜」という語は、中国語では「値段が安い」という意味である。「便宜一点好不好？（もっと安くしてくれ)」という値段交渉のとき欠くべからざる一 語だ。「嘘も方便」などという「方便」が中国語では「便利」という意味。「方便店」は「コンビニエンスト

ア」だ。

最後にこれを忘れてはならない。中国語の「爱（愛）人」は「愛人」にあらず「配偶者」の意味である。だから「これは私の“爱人”です」というのは、男性が言えば「妻」を、女性が言えば「夫」を紹介していることになる。また、若くてきれいな奥さんを「うちの老婆が…」と言えば「うちの女房（かみさんが）…」という意味だ。

前述した記事は、中国語学習初心者向けに「同形語」の存在がいかに日本語とは語意領域において「似て非なるもの」であるかということをユニークな視点でわかりやすく説明しているが、もう一歩踏み込んでクリティカルインシデントを引き起こしやすそうな同形異義語・同形類義語について多少の考察を加える。ただし、ここでは漢字の表記による差異には触れていない。中国人とのコミュニケーションの機会があれば是非とも心に留めておきたい。

4-1. 教育現場で使用頻度の高い日中同形異義及び同形類義語

語彙	日本語の意味	中国語の意味
学長	大学の長	同窓の先輩
勉強	学ぶ　経験を積む　値引きする	いやいやながらする　無理強いする
合格	試験に受かる	ある条件に合う
質問	不明点をたずねてはっきりさせる	相手を責めて問い詰める
読書	本を読むこと	勉強する　学校に通う
講義	専門的な内容を説いて教える	授業のために教員が用意した原稿
暗記	見なくても言えるように覚える	密かに書き留める
行事	日を決めて行う儀式や催し	実際に物事を行う　事を進める
提出	資料･書類をしかるべきところに出す	意見や要求などを提起する
単位	大学などで学習量をはかる基準	機関や団体　勤務先
零点	試験や競技で得点が全くないこと	深夜零時
約束	取り決め	人の行動を束縛すること

日中同形語の誤解によるエピソードを上げれば枚挙に暇はないが、決して笑い話で済まされる事ばかりでもなく楽観視はできない。日本人の教授が静かに「君に質問しているのだ。どうなんだね。」と中国人学生にただ単に問うたことが、学生にとっては問い詰められていると感じたり、「意見は私まで提出しなさい。」と社交辞令的な投げかけをし学生から厳しい要求を突きつけられて反対に激昂する等、漢語の使い方一つでクリティカルインシデントが発生する可能性もなくはない。更に「必ずしも講義の内容を暗記しろとは言わない。」などと日本語特有の曖昧表現が加わった場合などは、果たして中国人留学生の何割が正確に発信者側の意図を理解できるかは推して知るべしなのかもしれない。

日中間の言語文化はその形態（漢字）や音韻（発音）の類似点が多い分、油断や思い込みといったも潜在的な要因も加わり、互いが各々の概念で判断してしまうことで正確なコミュニケーションの成立が阻害されることもある。

5．ま と め

本稿で挙げたクリティカルインシデントの事例は、実は重篤な危機とはなり得るものではなかろう。しかしながらひらがなやカタカナやの中にまじる漢語と、漢字だけで構成される中国語の違いは語意領域で大きな差異があることを認識することは、日中間の異文化理解の一つ要素であるということを知っておく必要がある。日中間のみならず自分の属する言語を基準として、他言語の意味を判断することは一方通行の押しつけの異文化理解になってしまう可能性があり危険でもある。異文化理解はまず言語コミュニケーションの遂行が前提であると考えた場合に、相互の価値観、風俗習慣、道徳規範の基準、生活様式、思考方法、審美観など特殊な文化的要素で内包されている背景も念頭に置くことが重要であろう。

多文化共生のためには、異文化に遭遇した時、たとえそれが自分の文化の価値観と異なるものであってもその価値観を基準として自文化の優越性を信

じ他文化が劣っていると評価するような狭量な自文化中心主義を改め、すべての文化の間に優劣はなく、それぞれの文化に独自の価値観やものの考え方があるとする多角的、複眼的視野を持って相手の文化を認め、また敬意ある態度で接することが大切であろう。

本稿で述べた D・I・E 法は自文化と多文化を客観的に分析できる初歩的な判断スキルとして有益であると考える。

参考資料

中国語と対応する漢語 ― 日本語教育研究資料（1978年）文化庁（編集）

参考文献

石井　敏 他（1996）「異文化コミュニケーション」有斐閣選書
石丸暁子（1999）「コミュニケーションの諸相」九州大学出版会
稲村　博（1980）「日本人の海外不適応」NHK ブックス
岩男寿美子　萩原　滋（1987）「留学生が見た日本」サイマル出版会
岩男寿美子　萩原　滋（1988）「日本で学ぶ留学生」勁草書房
大河内康憲（1997）「日本語と中国語の対照研究論文集」くろしお出版
郭　明輝 他（2011）「日中同形異義語1500」国際語学社
賀川　洋（1997）「誤解される日本人」講談社
葛　文綺（2007）「中国人留学生・研修生の異文化適応」渓水社
金谷　譲　林　思雲（2005）「中国人と日本人　ホンネの対話」日中出版
金谷　譲　林　思雲（2010）「続・中国人と日本人　ホンネの対話」日中出版
ケイ　志強（2006）「留学生を日本の宝物として扱おう」日本橋報社
顧　令儀（2012）「日中同形語 ― その学習着眼点と教授法 ―」愛知大学中日大辞典編纂所
小坂貴志（2007）「異文化コミュニケーションの AtoZ」研究社
彭飛（2006）「日本人と中国人のコミュニケーション」和泉書院
園田茂人（2001）「中国人の心理と行動」NHK ブックス
竹田治美（2005）「日中同形類義語」について　奈良女子大学人間文化研究科年報
鄭　麗芸（1999）「日中比較文化論」駿河台出版社